

脳梗塞の息子（二）初台リハビリ病院

中村 アキヤ

初台リハビリテーション病院

京王線の初台駅から十分ほどのこの病院は、これまでの病院のイメージを全く感じさせない雰囲気がある。一階の瀟洒なフロアの受け付けデスクを過ぎると、中心にエスカレーターのある明るいホールに通じ、そこには車椅子や装具の展示販売のコーナーと、ゆつたりした喫茶室以外は、病院に有り勝ちな待合室の雑踏やら白衣の医師や看護師の姿はみられない。

二階の待合室からガラス越しの広い空間に理学療法室、作業療法室やら言語療法室が配置され、清楚なユニフォームの看護師と明るい着衣の患者が甲斐甲斐しくリハビリに励んでいるのが見学できる。

事務員、看護師はみな若く、はつらつとしてよく訓練されており、礼儀正しくて好感が持てる。各人が献身的に患者の面倒を見てくれているので、患者の家族の付き添いは不要である。医師、OT、PT、ST、ソシアルワーカー、および介護担当はカンファレンスと称する連絡会議を定期的に開き、患者の状況につき全てを共有しているので、患者は毎日の生活およびリハビリに関して不安、不便を感じずに過ごすことができる。

毎月の行動計画には患者の現状、回復の度合い、今後の治療方針など明確に記載され、患者、家族ともに精神的に非常に頼りになった。

また毎月土曜日のコンサートや季節ごとの餅つき大会、クリスマスパーティーなど心温まる催しに癒やされた患者は多い。

この病院は二〇〇二年六月オープン。発症から二ヶ月以内の患者を引き受けて、百五十日間まで入院させる。都内二十三区在住の患者が対象で患者の八十一%が脳梗塞、腫瘍、くも膜下出血とのこと。

スタッフ数は四百三十九名（通常なら三百床に相当）でここでは病床数百六十四床でケアに人数をかけている由。

快適そうな病院である。もうあとは病院スタッフと本人の努力に任せるしかない。哲也は病院が快適なので、家族が毎日こなくてもよいと言う。やっと少し希望が見えてきたかな？

通常の病院では入院後三ヶ月経過後は自動的に退院させられる。三カ月前に突然不具者、障害者になった患者をかかえたまま退院させられた家族はどうすれば

よいのだろうか？

9月16日

七時半起床・朝食

十時から理学療法（専用の治具を装着しての歩行訓練

十二時二十分 昼食後入浴（隔日）

午後二時半から言語療法（当初は発音よりは理解力が主とのこと）

午後四時から作業療法（手の動きを改善）

午後六時夕食 午後十時半 就寝

個室しか空きがないというのでとりあえず入室。できるだけ早く通常の四人部屋に移りたいとお願いした

面会は朝八時半から夜十時半までOKとのこと。気分が変わったのか初日から早下手が少し動いたような気がして哲也は喜んだ。杖について病棟内を散歩した由。

私は友人の神田洗さんのお宅にお邪魔して、彼の経験した脳梗塞の状況を伺う。先方夫妻の経験談では、やはり言葉は三ヶ月目から徐々に出てくる由。くれぐれも焦らずにとのアドバイスがあった。

9月22日

ソーシャルワーカー松永さんの説明を聞く。介護保険は四十歳以上から申請でき、一ヶ月で認定が降りる。特定の病気で入院中ならOKとのこと。

高額負担金還付金や入院保証手当金の話。障害保険は発症後二ヶ月してから申請すればよい等々。保険の話は複雑でなかなか理解できない。具合的な細かい話になると説明者もシドロモドロになる。

個室使用のため、今後の多額の入院費用の話の際、哲也は傍で聞いていて、済まないと二回頭を下げたが、両親ともに気が付かない振りをした。

9月23日

願いが叶って通常価格の四人部屋への転室が決まる。哲也は個室が快適だったのでやや不満だが、経済性を説明して納得してもらおう。

携帯電話の費用がかさむので種々のサービスを止めるべく弟の晋也が代理店に電話。何をするにも暗証番号が必要で目的を果たせない。

9月24日

改めて哲也に携帯電話の暗証番号を聞く。哲也はいろいろと考え、ついに数字を思い出しながら書くことが出来た。脳が序々に回復しているのか？

下肢装具の型とりを石膏布で実施。費用は約十二万円でこのうち七十%は補助が出る由。十月十日に仮型を合わせて五日後に完成の予定。

突然、本当に突然、哲也が「なだそうそう」のメロディを口ずさむ。ターターと発音している。発音の練習は、うまく出来ないのでやりたがらない。あ行とま行のドリルを作って持参したが、気乗りしない。

右手のほうは拘縮したまま進歩が見られなかったが、右手のマッサージ途中で、肘から上の部分を持ち上げる練習をさせられ数回持ち上げてみせた。

アレ？ 右腕が動くぞ！

新しい装具をつけて歩行練習。車椅子から立って杖だけでゆっくりと歩ける。もう直ぐ、車椅子なしで移動することができそうだ。

10月9日

笹井先生と面談。

- (一) 発症の原因は高血圧で当初は薬を六種投与したが、現在は四種に減っている現在七十キロの体重がもつと減ればさらに薬は更に一種減らせる。
- (二) 減塩食、エネルギーコントロール食で血圧は百三十〜九十で安定した。
- (三) 血圧の他に糖尿、コレステロールの懸念がある。昔は三十代、四十代で動脈硬化から脳梗塞になったが、今は珍しい。

L	D	L	一五八	(基準値	七〇〜一三九)
中性	脂肪		一八二	(基準値	三五〜一四九)
H	D	L	三三	(基準値	四〇〜八六)
尿	酸		一〇・七	(基準値	三・七〜七)
クレアチニン			一・五七	(基準値	〇・六一〜一・〇四)
血	糖		一一一	(基準値	空腹時 七〇〜一〇四)

(四) リハビリの状況(十二点を満点とした場合) 上肢 二〜三点、下肢 四〜五点、言葉 一点。

- (五) あと一ヶ月で機能の急改善は止まる。右手は麻痺が残る。ものを押さえられる程度か？ 左手の訓練に二ヶ月はかかる。言葉は回復まで半年から一年。退院はこれから最低三ヶ月後となり以降は外来訓練となる。

- (六) 介護保険の申請は早いほうがよい。内容は、ヘルパー、介護、設備、住

宅改修など二十万円まで十%の補助が出る。住宅の改修には家の見取り図、写真などを提出して欲しい。

10月11日

哲也は上手に杖で歩くことが出来るようになった。左足を前に出すとき踵が先に出ることが少なくなったと介護士に褒められ哲也ご機嫌。

哲也はメモ帳に沢山のJRの駅名を書いている。参考にと私が自宅で駅名をパソコンで打って持参したが、逆に二、三の駅名の間違いを指摘された。壊れた脳がいろいろと思いついてきているようだ。ついでに東京二十三区の名前を置いてくる。

発声の練習機械が来たが、余り使い勝手が良くない様子で不満そう。

病院の待合室でリハビリの待機をしていると「イチ、ニツ、サン」と大きな声が聞こえた。みると巨人軍の長島元監督がジャージー姿で廊下を走っている。何年か前に脳梗塞で倒れ、この病院でリハビリを行っている由。脚は完全では無いが、装具なしで小走りではあるが走ることができる。ただ片手はほとんど動かず言葉も自由自在ではないようだが、いずれにしても哲也よりは先輩だ。完全でなくても彼ぐらいに治ってくれたら有難いと思った。

10月15日

下肢の保護具の調整。歩行中に拘縮した右足の指が曲がってくると痛くなるので当たる部分に枕のようなパットを貼り付ける。下肢保護具のパットの調子が悪く一旦はずして様子をみることに。

10月18日

哲也疲れからか体調悪くリハビリは休んだ由。なんとか発音を上手くやらせたいが本人は自信がないし、そういう時は意欲もない。

哲也はTVのイヤホンを両耳で聞きたい由。(備え付けのイヤホンは片耳だけ)両耳用イヤホンのコードを弟の晋也が探してきた。

10月19日

介護保険の申請を若松町出張所にて実施。医療費支援のための申請書を信濃町の東京医業保険組合に提出した。区役所介護課片瀬さんから保険証をファッ

クスするよう要請があった。いろいろと事務作業が煩雑だ。

日本生命、ソニー生命に連絡し、保険金受け入れの書類送付を依頼。また哲也の入会していた種々の会に脱会届けを提出する。

10月22日

哲也、病室から車椅子なしで十メートル離れた食堂まで往復できた。疲れるらしい。右手の肘の曲げ伸ばしが少しずつできるようになったが、指はまだ全く動かない。シャツとズボンの着脱訓練、左手だけで上手くやっつてのける。

左手で山手線の駅名を漢字で書いている。ひらがなは、あ行、か行の書き取りをやっている。リハビリ以外の時間はイヤホーンの調子がよくTVを見ているようだ。

三菱銀行西口支店で通帳の再交付を依頼した。本人の署名がいるとのこと左手で書いてもらう。これが発病以来の最初の書類になった。

障害手当て申請書第一回分を東京セントラルに送付した。

哲也の銀行口座から自動引き落としの契約のある(株)クリエイションに電話しオートシップを止めるよう要請し、ファックスを送付。残るはライフ社(青山商事)の月賦中止の手続きのみとなった。

10月26日

哲也の発声練習に立ち会う。あ、か、は、ま、行は比較的よく発音している。有望だ！ 肘の屈伸、右手各指の感覚、小指の曲げ広げなど少しずつ進歩している。一人で着替えをやるように言われていた。とにかくなんとか頑張っ欲しい。こうなったら本人の努力しかないのだから！

10月31日

生命保険のサインを哲也がする。平成二十一年を間違えて二十五年と書く。数字など間違いが多い傾向があるのかもしれない。本人は間違えてチョットがっかりしていた。最近はTVを良く見ている。体が安定し少し退屈気味。

ギターもいじってみたいという。漫画も読みたいと。

このごろは杖なしで二十メートルは歩ける。トイレに行くにも車椅子は使わずだいぶ進歩した。

新宿区のほうから介護保険認定の調査員がきた。病院からは十二月のはじめにスタッフによる家庭訪問(改造指示)を予定している由。

正月は一時帰宅。退院は二月頃との内示があった。

秋たちぬようやく乗れる車椅子

病室の天井見入る夜長かな

冷たき指広げリハビリ終了す

別れ際左手あげて秋の暮れ

リハビリを見終わり熱きコーヒー飲む

正月まで長島さんのようになれ

11月3日

笹井先生との面談があり、次の通りの説明があった。

(一) 脳卒中の後期は拘縮という、指などが鉤のように曲がって固まり筋肉が固くなる症状が起こる。

(二) キヤバロンという薬を当初は一錠、後に三錠投与する。

(三) 血圧は下がってきたので来週から薬を減らす。

(四) 血液検査結果も良くなっている

尿 酸 十・七↓八・二 (基準値 三・七〜七)

クレアチニン 一・五七↓一・三六 (基準値 〇・六一〜一・〇四)

糖 尿 六・三↓五・九 (基準値 五・八)

血 糖 値 一一↓九九 (基準値 空腹時 七〇〜一〇四)

(五) リハビリについて、歩行はだいぶ進歩したが、言葉は長期の治療が必要なので焦らずに。

家庭訪問を十一月下旬に予定している。自宅療養では特に食事に注意するよう指導を受ける。また運動量を確保することが重要と。

大事なことは精神的な苦しみ、肉体的な苦労を本人と共有すること。

11月6日

日本生命に保険書類を提出。担当の上田さんが病院へお見舞いに来てくれた。

哲也はTVをよく見ている。漫画の本も時々。

近所の前沢工務店にバリアフリー工事ができるか聞いてみた。経験ある由。

余丁町のレンズ屋で哲也の眼鏡の視力調整の相談をした。事前の連絡があれば対応可能とのこと。哲也はだいぶ乗り気になっている。

哲也の右肩の痛みはだいぶ減った。明確な言葉にはならないが良く喋るようになった。

11月8日

本人には直接いえない父親の心境。

「哲也君よ。今日は私の七十三回目の誕生日だ。幸せな老後を送れると思っていたが、君が倒れ思わぬ事態が生じた。最初のうちは君の将来が、また私の老後がどうなるかと思つて毎日が辛かつた。

君も、突然身体が不自由になり、喋りたいことも伝えられなくて、よく我慢していると思うよ。でも周囲の皆様のお蔭で病状もだいぶ安定し、杖を突けばなんとか歩けそうだし、右手も、おしゃべりも、時間が経てばかなりのレベルまで回復しそうだ。私はあと二年ぐらいは健康で頑張れるからそれまでに治ってくれよな。

それにしても君のお母さんの割り切りと落ち着きには敬意を表する。内心いろいろと思つてはいるのだろうけれど決して悲観的なことを言わないのだ。

弟の晋也も暇さえあればお見舞いに行つて君のために欲しいものすぐに調達してくれている。感謝しろよ。そして一日も早くよくなつてくれ！」

11月12日

これまで日本生命の上田さんと都合三回も会い、家中を探し回つて生命保険の契約書に使われた印鑑を見つけた。重要な契約書に用いた印鑑は別扱いとして、大事に保管すべきことを痛感した。

やつと手続き開始だ。一方ソニー生命（福島さん担当）の手続きは完了し、保険金は哲也君の口座に入金されたとの連絡あり、後日確認の予定。

11月14日

レンズ屋の山地、甲斐両氏が初台まで来て病室で哲也の検眼をしてくれた。メガネの新調には1週間かかるが、哲也は楽しみにしている。

最近リハビリの様子は見ていないが、今は階段の昇降も練習している由。

本人は結構頑張っているが、毎日のタスクがきつくややへバリ気味。このところ病状が安定し、周囲も精神的余裕が出てきた。

11月15日

病室に行つたら哲也は寝ていた。右肩が痛いらしく不機嫌。何を言つても陰気な答えに、こちらもいい加減嫌になつて早めに帰宅した。本日、ソニー生命からの入金確認。

11月16日

今日、哲也はすこぶる機嫌がいい。昨日の例もあるので両親が見舞いに来ても眠かったら「寝たいから」と断ってから寝るようにとிட்டた。こちらも折角来て不機嫌だったら早く帰りたくなると注意した。

本が見たいという。漫画か？いや、週刊誌か？いやノートに一〇四八という数字を描く。十時四十八分なんていう漫画あるのかい？漫画ではない。弟の晋也に聞こうと電話したが不通。

本の値段はいくらくらい？三百、八百、千円と書いたら、千円を指差す。とにかく本屋で調べるからといって帰途本屋に寄る。村上春樹のベストセラー「I Q 48」が目にとまった。これだ！値段は千八百円で上下三巻だ。

なんでこんな本を知っているのだろうか？ TVでみたのか？ とにかく眼鏡が待たれる。

11月18日

眼鏡が出来上がったので午前中に届けるが、リハビリの最中で眼鏡どころではない。立ったままで右腕を挙げる稽古。上腕部が肘の高さまであがる。おろしても固まらずに下まで伸びるようになる。でも余り伸ばすと痛いらしい。指を広げて感覚を試している。杖なしで食堂まで歩かされ、ヒュー言っている。でもこの進歩はまことに嬉しいことだ。

11月19日

病院スタッフの家庭訪問日が十一月二十四日に決まる。それに合わせてタクシーの乗車の練習を始めるという。前沢工務店に無理を言って家庭訪問日に家の改造の打ち合わせのため都合をつけてもらう。

11月20日

昼前のレッスンで「おはよう、ありがとう、ごめんね」などの練習を聴取。まだはつきりとは聞きとれないが、少しずつ喋れそう。購入した本は少しずつ読んでいる模様。帰宅後、スタッフの家庭訪問に備えて家までの路順の地図をつくる。

日本生命から手続き終了の手紙がきた。これで保険関係は全て終わりだ。

11月24日

家庭訪問。初台のケアマネジャーの二瓶、藤井両氏は電車で、哲也と私は

タクシーで家に向かう。発症した8月5日以来の三か月半ぶりの帰宅だ。

自分の部屋のある二階への階段昇降は辛そう。廊下のほんのチョットした段差でも降りるのは難しそうだ。もつといけると思ったが。

前沢工務店の社長、大久保高齢者総合相談センターの阿部所長も来宅。打ち合せも終わり日帰りでも病院に戻った。初めての同行外出で親子とも緊張した。

11月29日

病院にいったが、哲也は不機嫌で落ち込んでいる。ゴロンと寝たまままで起きてこない。段々正気に返ってきて、現状に不満なのか、将来に不安があるのか。「人間は現実を直視して、前向きに進むしか人生は開けないぞ」というようなことを話してやったが、本人は納得したのかしないのか？

帰宅して、哲也の不機嫌の原因は、リハビリの際、階段を上手く降りられなかったのが不満で不貞寝していた、と妻から聞いた。笹井先生と面談の折、来年1月15日に退院すると決定。

12月11日

退院に備えて哲也の部屋の整理。大量の本をブックオフに売却。早朝にソファーなどの粗大ゴミを出す。

近況報告のため哲也の会社東京セントラルを訪問。哲也の休職期間は一年間だけと通告された。

12月17日

哲也の外出訓練。ケアマネージャーと三人で病院から清水橋まで歩く。大江戸線で新宿西口まで。ビッグカメラに寄り、カラオケのセット、血圧計などを見て回る。疲れるらしく二回喫茶店で休憩する。バスの乗降にやや不安が残る。

12月19日

十九時三十分に哲也の勤務先の東京セントラル久保さん、中島さんが初台病院にお見舞いに見える。

区役所にて障害者手帳を受理。タクシー券、フリーチケットなど貰う。有難いことだが手続きが大変で難儀した。

初台にて区の阿部さん、松本さん、病院側は松永さん、藤井さんと面談。退院後のスケジュール、引継ぎ事項（血圧自己管理、内服薬支給など）打ち合わせ

せ。介護保険適用でベッドのレンタルを申請。三ヶ月は無償で貸与とのこと。退院後は通いで週2回のリハビリ。発声練習のテキストを貰う。ノートでコミュニケーションを図る。初台友の会に入会を勧められる。

地域では、都の障害者センターで毎週木曜日集まりがある由。参加を検討したが、巡回バスのケアは老人ばかりで哲也に向かない。その他、失語症の会入会の可能性など検討する。

12月22日

病院で階段昇降の練習。新しいプラスティックの補助具靴の購入。お風呂の入り方の練習。

12月25日

哲也用のベッドが家に入荷した。

初台では、担当の内野さんと病院外周を一周したが、問題なく歩けた。エスカレーター昇降三回練習。その後二瓶さんとパソコン練習をしたが、哲也は全くの素人に戻ってしまった。ローマ字が打てない。スリースキーがわからない。確定キーも判らない。チョットがっかりした。本人も自信喪失気味だ。

哲也は友人の大隈君がお見舞いにくしてくれる日にちを私に教えるのに、口がきけないので私のカバンの中の手帳を探して開き、三十日の箇所を示した。

入浴の訓練があり、身体を拭いているうちに、病院のクリスマス行事が終わってしまったが、病院スタッフの方々からクリスマスカードを貰った。わざわざ励ましのカードを作ってもらい、有難くて泣きそうになり内容が読めなかった。

12月26日

午後から初台で餅つき大会があった、哲也も黄色の法被を着せられ片手に杵を振りスタッフに助けってもらい餅をついた。餅は美味しかった。スタッフが陽気に掛け声をかけてくれるのは有難かった。

哲也の帰宅に備えて、家の廊下の凸凹部に蛍光テープを貼った。

12月27日

哲也が「木」とか「月」とかを発音して見せてくれた。初台では上手くできたらしいが、まだまだ。「こてこて」としか聞こえない。そこで「こて」と書

いて、このようにしか聞こえないと言おうとしたら、ウンザリした顔で「もういいよ」と言った。無意識でならしゃべれるのだ。

家の部屋には仕切りのカーテンが吊るされ、哲也の受け入れ準備はほぼ完成した。哲也の一時帰宅日は十二月三十一日である。待ち遠しい。

12月31日

哲也は病院内の床屋にいった。八月に脳内の血を抜くために丸坊主にされていらいの散髪である。サッパリしたねとか男前ねとか病院のスタッフにからかわれて嬉しそうに照れ笑いしていた。すぐに支度をして一時帰宅の出發である。

本人の肩掛けカバンにもテキストやら身の回りのものを詰めかなり重そう。付き添いの小生は哲也の着替えをつめたバッグの外、お風呂に使うシャワーチエアとゴムマットを持つ。自分の小バッグと占めて三個。その上哲也をケアしなければならぬ。

病院から大江戸線西新宿七丁目駅に向かおうとしたら哲也は不思議そうな顔をする。当然タクシーで帰ると思っただけ。これもリハビリの一種だからと哲也を納得させて歩き出したが、あとで思えば無理な注文であった。退院前の一時帰宅の日からかなりの距離を歩かせたのだから。父親としては、息子がかなり治ったものと勘違いしていたのだ。

工事中の道路は凸凹でゆるやかな下りである。哲也は杖を持つ手が冷たいと云いだした。手袋は無い。我慢せよ。道程の半ばまで歩くと疲れが出たらしく途中で止まってしまふ。天気はいいのだが風が相当強い。ややミジメな気持ちになる。駅まで普通の足で十分のところ三十分を要した。到着駅の東新宿駅からはバスが中々来ない。家では当然タクシーで帰ると思っただけ。「遅かったわね」と非難された。

除夜の鐘がなって私だけ近所の西向天神社に御参りした。今年はどうな年になるのだろうか。病院の指示通り哲也と同じ部屋で寝た。哲也は疲れていたと見えすぐ寝息が聞こえた。

平成22年1月1日

哲也は午前中に何度も二階に上がり、ゲームの器械やらDVDやらを探して一人で遊んだり、PCを操作したり携帯電話をいじったりしたが、どれも操作

法を忘れて上手く使えないと残念がる。

暖かい昼になって、二人で近所の抜弁天巖島神社に参拝にいった。哲也がデザインした弁天様の書かれた幟やポスターが随所にあり彼は満足げであった。病院からの宿題をやった。簡単な単語の発音を母親の口元をみながら練習した。発音はかなり明瞭になり進歩しているのがわかった。やはり家族との会話を通じて徐々に言葉を思い出すということらしい。

「これでいいや、こつちが」などの言葉をしゃべっていた。夜は親戚が集まりワイワイ騒いだ真ん中にいたが悪い気はしなかった模様。大好きなアルコールはシャンペン、日本酒と少しづつ飲めて幸せそうな顔をしていた。

1月2日

妻と三人でタクシーで初台に帰院。東京都支給の無料タクシー券を使用。

1月3日

病院に行くとき哲也は一人でご最良の阪神タイガースの応援歌「六甲おろし」を歌っていた。発音は不明瞭だが、少しずつではあるが、思い出してくるらしい。帰宅したら、夜に歌詞を印刷して明日渡してやろうと思う。

1月4日

笹井先生と面談。一月十三日の十四時に退院と決定。外来リハビリの計画は後日設定する。内科的には尿酸値がやや高め。退院後の飲酒は蒸留酒がお勧め。

日本酒換算一合が限度で、それ以上では卒中再発の危険性がある。煙草は止めること。

介護保険による住宅改造補助の申請に区役所に行った。退院後に手続きをとる由。入院費用三十一万円のうち十八万円が返ってくる。

1月9日, 10日

言語リハビリの場所として障害者福祉センターおよび曙橋のリハビリ施設を覗いてみた。どちらも現在の哲也の足ではチョット遠くて通うのは無理。

1月11日

初台への通院経路の研究をした。地下鉄西新宿七丁目、中野坂上、新宿三丁

目、渡るべき橋や、初台などの各駅のエレベーター（のぼり）階段（下り）を調べたが、どれも一長一短。

哲也携帯電話の充電キットが欲しいというので売っている店を探した。

1月12日

地下鉄中野坂上のエレベーターを使えば無理なく地上へ出られることを発見して抜弁天（バス）東新宿（大江戸線）中野坂上（バス）初台病院のルートが最適であると判明した。

福祉介護士の松本さん、山下さんがヘルパーの野津さんを初台に連れてきて初台スタッフと打ち合わせ。松本さんによると話し方を教える先生は探すのに難しいとの事。やはり家族で協力して教育しなければいけないと痛感した。

哲也右腕が胸まであがるので嬉しくなり皆の前で立ち上がって披露する。

哲也がいろいろ話しするがサッパリわからない。二人だけだったので真面目に「君が話していることは八十%わからない」と正直に伝えた。

本人は相当ショックとみえ涙を浮かべて黙ってきいていた。

「だから真剣に言葉のリハビリをやらないと。これから二十五年生きるとするとこのままの調子では、本人も周囲も辛いから、頑張つてリハビリしてくれ」と頼んだ。本人は喉を押さえてチャント話していると主張した。

「君は若いのだから必ず治ると信じて必死で頑張れ、これは逃げられない現実だ。前向きに対処するしか生きる道は無いんだ。お父さんも余生を君の復活にかけて頑張るから」と説得しながらいつまでこんな話をするのかと涙が出てきた。哲也があとで落ち込まなければいいかと心配しながら病院を辞した。

脳梗塞の友人の細君が退院するときは一言も話せなかったそうだが、君のほうのマシなので見込みがあるとも言ってやった。

1月13日

昨日のことがあるのでどんな顔でいるか心配したが杞憂に終わった。そんなに深刻には感じていない模様。明るい顔で積極的に話そうとする。

「六甲おろし」を一緒に歌った。今日は御鼻眞球団の名を「ハンシン（阪神）」とはつきり発音できた。

1月15日

信濃町の健康保険組合に行き哲也の下肢装具の補助金の申請をした。また、新宿区役所にて障害者の補助の申請用紙を提出した。

健保の補助額がわからないと補助金が下りない由、四ヶ月はかかりそう。確定申告には間に合わない。

東京セントラルからお見舞いに来たいというので初台の病院から原川さんに電話した。途中から哲也に代わった。何を言っているのかは判らなかつたらしく「声だけからはお元気そうですね」とは原川さんの弁。

TVの整備が終わって哲也の退院後の受け入れ体制がほとんど出来上がった。

息子の退院は嬉しいが、右半身麻痺、失語症の息子を迎えてこれからどんな生活になるのだろうか？（続く） （一〇、三五七語）